

特集陳列

葵祭の美術

The Aoi Festival:
A Thousand-Year Tradition

— 千年の伝統 —

2015年
4月21日(火)～5月31日(日)
【平成知新館 1F-2】



葵祭の歴史

葵祭は、古くは賀茂祭と言われ、五月十五日(旧暦四月の中西の日)・十干十二支を用いる日付法では、十二日毎に酉の日が来るため、月に二～三度酉の日があります。中西はその中間、二の酉の年は下の酉の日になります)に行われる賀茂御祖神社(下鴨神社)と賀茂別雷神社(上賀茂神社)の例祭を指します。

葵祭は、祇園祭・時代祭と並んで京都三大祭と称されますが、京都三大祭の中でも最も古く、平安時代では「祭」と言えは葵祭を指したほどでした。

「葵祭」の呼称は、賀茂社の神紋となっている二葉葵を祭儀の装飾に用いたことに由来しますが、その呼称の定着は遅く、元禄七年(一六九四)の再興以後とされています。さて、賀茂社の由来は古く、下鴨神社はその名の通り、上賀茂神社の祭神である賀茂別雷神の母である玉依媛命と玉依媛命の父・賀茂建角身命を祀ります。賀茂建角身命は、神武天皇の東征を助けたといひ、その子孫が両社の祭祀を継承した賀茂氏とされています。賀茂氏は、両社一帯の地を勢力圏とした大和朝廷に仕えた豪族でした。

このような賀茂社の歴史に相応しく、葵祭も悠久の歴史を持っています。六世紀に鴨の神の祟りで飢餓疫病が蔓延したことを機に行われるようになったと伝えられています。走馬の神事は草創期からあったようですが(『本朝月令』所引『秦氏本系帳』逸文)、それが展開する形で早くから祭日には騎射も行われるようになったと見られ、現在でも下鴨神社の流鏑馬神事にその名残を見ることが出来ます。『続日本紀』文武天皇二年(六九八)三月二十一日条に「山背国賀茂祭の日、会衆騎射を禁ず」とあるように、恐らく混乱を防止するためと思われるが、群衆が集まることを禁止していますので、七世紀末には相当の規模に発展していたことがわかります。

奈良時代に入ると、山城国司の臨検下に置かれ(『続日本紀』和銅四年(七一二)四月二十日条)、その後、国司の行う国祭となつたと見られます。後に賀茂社は山城国

の一宮として遇されるようになりますが、賀茂祭は、賀茂氏の祭祀から官祭へと変貌を遂げるのです。その意味で、葵祭(路頭の儀)の前日(中申の日)に行われていた賀茂国祭は葵祭の一世代前の姿をとどめたものと言えます。

平城京から長岡京を経て平安京へと、奈良から京都に都が遷ると、賀茂社は王城鎮護の神として朝廷から篤く尊信されるようになります。

大同元年(八〇六)、賀茂祭が始まったという記録があり(『二代要記』・『皇年代略記』)、これを勅祭の開始とする説もあります。後述するように賀茂祭は弘仁十年(八一九)に中祀へと昇格されますが、弘仁九年以前に原形が成立したと見られる「内裏儀式」に「賀茂祭日警固式」が登場しますので、それ以前から官祭となっていたのは事実のようです。

翌大同二年五月には、賀茂両社の主祭神である賀茂御祖神・賀茂別雷神に正二位の神位を朝廷から授与され(『日本紀略』)、賀茂社の格式はここに定まります。

弘仁元年(八一〇)、嵯峨天皇は、葉子の変の際に賀茂神に戦勝祈願した返礼として皇女・有智子内親王を賀茂社奉祀のため齋院に任じたとされますが(『本朝月令』・『二代要記』)、実際に齋院司という役所が設置されるのは弘仁九年のことになります(『類聚三代格』卷四他)。以降、皇女・王女が歴代の齋王となり、賀茂齋院は伊勢齋宮と並びに至りました。

賀茂齋院は、その後、朝廷の衰微によって承久の乱(一二二二年)を契機に断絶しますが、現在、葵祭では、毎年、未婚の女性を齋王代に選抜して、かつての齋王に代わって神事を掌らせており、十二単に身を包んだ華やかな姿で話題を集めています。賀茂齋院は、地名をとって紫野齋院とも呼ばれたように、現在の上記区上御霊前通大宮西入近辺に置かれ(樅谷七野神社内に賀茂齋院跡石碑)、齋王はここで清浄の生活を営みながら、神事に従事したのです。



葵祭の牛車

葵祭には、二両の牛車を見ることが出来ます。この牛車は京都御所に保管されており、御所の春秋の一般公開でも展示されることがあります。

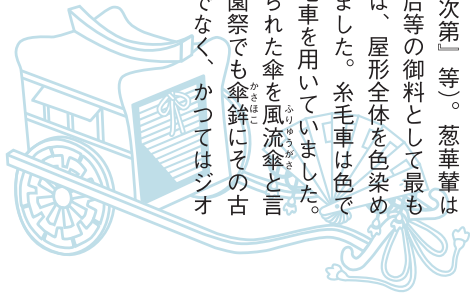
勅使列の牛車は、唐庇網代杏葉車というものです。唐庇の車を唐車と言い、最も格式の高い形式でした。上皇・摂関・勅使の料です。本来、勅使は騎馬で、元禄の葵祭再興当初は関白近衛基熙の指示で板輿を用いましたが、『野宮定基日記』元禄七年四月十八日条等、その後、現在のように唐車が騎馬の勅使とは別に行粧として形式的に用いられるようになりました。

女人列の牛車は、唐庇八葉車です。八葉車は広く使用された形式ですが、ここでは唐庇となっています。また、牛車の前の簾の下を勅使列と比べてください。勅使列では前の簾の下に何もありませんが、女人列ではカーテンのようなものがはみ出して垂れています。これは下簾といい、女性が車に乗る場合は出衣といってこれを前に垂らしたことからきています。

平安時代の斎王は、路頭の儀では葱華輦もしくは牛車に乗御され、牛車の場合は下鴨神社に到着した後、葱華輦に乗り替えていました（『長秋記』大治四年四月二十五日条「江家次第」等）。葱華輦は屋根の頂部に擬宝珠を置いた輿で、天皇・皇后等の御料として最も格式の高いものでした。また、かつて、女使は、屋形全体を色染めした糸で覆った牛車（糸毛車）に乗御していました。糸毛車は色で身分を表していましたが、賀茂の女使は赤糸毛車を用いていました。ちなみに、行列を彩るたくさんの造花で飾られた傘を風流傘と言います。祭の山車の原形となったもので、祇園祭でも傘鉾にその古い姿を留めています。風流傘には、造花だけでなく、かつてはジオラマのような飾り物も付けられていました。

展示作品一覧

- 年中行事絵巻模本 三巻のうち
- 車争図屏風 右隻 六曲一両のうち一隻 京都・仁和寺
- 重要文化財 源氏物語画帖 葵帖 土佐光吉筆 四帖のうち一帖 京都国立博物館
- 八重葎時絵源氏筆筒 一基
- 祇園祭礼・賀茂競馬図屏風 左隻 六曲一両のうち一隻
- 賀茂競馬文様小袖 一領 京都国立博物館
- 吉野時絵三組盤 一式 京都国立博物館
- 徒然草 中冊 三冊のうち
- 能面（泥眼） 前熊コレクシオン能楽資料のうち 一面 文化庁
- 能面（般若） 前熊コレクシオン能楽資料のうち 一面 文化庁
- 光悦謡本 葵上 前熊コレクシオン能楽資料のうち 百冊のうち二冊 文化庁



そして、弘仁十年、葵祭は中祀に准じる勅祭となりま（『類聚国史』巻五）。大祀は天皇即位の時の大嘗祭のみですから、中祀とは実質的に平時最高格の国家祭祀ということになります。先述の『内裏儀式』では勅使の件は登場しませんが、弘仁十二年の『内裏式』では登場します。勅使派遣もこの中祀昇格を契機としたのでしよう。現在、葵祭は、石清水祭、春日祭と並んで三勅祭と言われ、平安時代の古式を今日に伝えています。その中でも最も古いものです。ですから、葵祭の行列では、つい華やかな斎王代に目が奪われがちですが、より重要なのはこの勅使の行列なのです。賀茂斎院が絶えても、葵祭自体が減びなかつたのはこれによります。

寛治七年（一〇九三）、堀河天皇が、宮中武徳殿で旧暦五月五日の節句に行われていた競馬の儀を、上賀茂神社に移したと伝えられています。これが名高い賀茂競馬の始まりで、現在でも上賀茂神社で新暦五月五日行われています。本来は、葵祭の後に行われた節句の別儀ですが、時期も近いことから、早くから一体の見所として親しまれました。現在では前後関係が逆転して葵祭の前儀として行われています。

このようにして、平安京の風物詩として定着した葵祭ですが、応仁の乱（一四六七年）以降の朝廷及び室町幕府の衰微や戦国時代にかけて賀茂社の荘園が有名無実化したこともあり、祭儀の経費負担に耐えられなくなりま。文亀二年（一五〇二）以降、約二百年近く勅使の行列路頭の儀）は中絶を余儀なくされるに至り、賀茂社だけで神祭が行われました。

近世、徳川幕府のもとで世相が安定すると、賀茂社も早々に社殿が復興されます。賀茂社は、寛永五年（一六二八）に造替され、そのほとんどの建物を今日に伝えており、上賀茂神社では四十一棟が、下鴨神社では五十三棟が重要文化財に指定されています。本殿のみは、平安時代中期以来、原則二十一年毎に式年遷宮を行うこ

賀茂社と葵

二葉葵（ウマノスズクサ科の多年草）は、上賀茂神社の祭神・賀茂別雷命が降臨された神山一帯に自生していたもので、神草として賀茂社の神紋となっています。葵は、古語では「あふひ」と訓じ、その語源は、草が日光を仰ぐようになびくことから「向ふ日」が転じたとする説、神を饗応する日を意味する「饗ふ日」が転じた説、「逢ふ日」に由来するとする説などがあります。

伝説では、天神である賀茂別雷命が、昇天した後、それを慕う母・玉依媛命の夢において「おのおのまさに吾に逢はむとせば、天羽衣・天羽裳を造り、火を炬き、鉾を祭り待て。また、走馬を飾り、奥山の賢木を取り、阿礼を立て、種々の緑色を悉せ、又、葵楓の縷を造り、厳しく飾りて待て。吾、まさに来たらむとすなり」と告げたといひます（『年中行事秘抄』四月中西日賀茂祭事・賀茂大神祭所引「賀茂旧記」、原漢文）。「葵楓」とは、葵桂のごとく、葵を桂の小枝に絡ませて飾りとしたものです。

この夢告に従って、賀茂祭では神招きのため冠の挿頭からはじめて到る所の裝飾に葵桂を用いることとなっています。これが、「葵祭」の呼称の由来となりました。『枕草子』でも「草は、菖蒲、菰、葵いとをかし。祭のをり、神代よりしてさるかざしとなりけん、いみじうめでたし。物のさまざまいとをかし」とあり、清少納言はその神さびた風情を激賞しています。

また、徳川將軍家は、三葉葵を家紋とし、その所縁で賀茂社に庇護を与えたことから、祭に先立つ旧暦四月一日に上賀茂神社から將軍家に葵を献上する葵使も江戸時代では恒例の行事となりました。

二葉葵は、かつては上賀茂神社境内周辺に自生、もしくは栽培されており、神山近辺にある上賀茂葵の森町・上賀茂葵田町などの地名に名残を留めています。しかし、二葉葵は、清流のある木陰を好むことから、一部の都市化が進んだこともあり激減しました。葵祭では毎年一万本以上の二葉葵が使用されますので、その調達には苦心があり、現在では貴船や雲ヶ畑といった鴨川の源流域で自生のもので採取されるほか、関係団体によって栽培事業も展開されています。なお、近世では、賀茂社の末社であった静原神社（京都市左京区静市静原町）の氏子が、静原沙汰人と称され、御蔭祭・葵祭に奉仕しており、周辺地で自生していた葵の奉納もその一環でした（『雍州府志』巻二）。しかし、この奥山の一帯でも葵が急減し、数十年前に奉納が中止されたとのことです。

とから両社共に文久三年（一八六三）の建物が残されており、国宝指定されています。本殿が国宝に指定されているため、現在の式年遷宮では修理という形式を取っており、平成二十七年は第四十二回目の式年遷宮に当たります。

葵祭の勅使行列も、元禄七年（一六九四）に靈元上皇や江戸幕府の後援で漸く復興されるに至ります。周知のように、賀茂社の神紋は二葉葵、一方、徳川將軍家の家紋は三葉葵で、賀茂氏と所縁があるともされたので、幕府の庇護を被ったのです。葵祭と呼ばれ始めたのは、実にこれ以降なのです。

明治維新、葵祭も激動の時期を迎えます。明治元年（一八六八）の東京奠都や皇室祭祀の改革により、明治四年から明治十六年まで勅使行列は中止されます。賀茂社関係者の尽力で、明治十六年一月、岩倉具視によって賀茂祭旧儀再興の建議がなされ、翌年に官祭として復興が認められ、勅使行列が復活します。更に、祭日も旧暦四月の中西の日から新暦の五月十五日に改められました。

しかし、第二次世界大戦の苛烈化に伴い、昭和十八年（一九四三）、路頭の儀は再度中止されました。戦後、昭和二十八年に至って葵祭行列協賛会などの努力で漸く路頭の儀は復興され、昭和三十一年には中世に廃絶した斎王代以下の女人列が復活したのです。また、明治以降途絶えていた下鴨神社の流鏑馬神事は、昭和四十八年の式年遷宮を記念して糺の森流鏑馬神事等保存会が設立され、復活しました。ここに、今日見る葵祭の姿が漸く整ったのです。



関連土曜講座◆「葵祭の美術」
 日時：5月16日(土) 午後1時30時から3時
 講師：大原嘉豊(京都国立博物館 保存修理指導室長)
 会場：平成知新館講堂(地下1階)
 定員：200名 聴講料：無料
 (ただし、観覧券が必要です)
 ※当日12時より平成知新館1階ケランドロビーにて整理券を配布します。定員になり次第、整理券配布を終了します。



